

膝周囲骨切り術を成功に導く基礎知識

中村 立一

Ryuichi NAKAMURA

春江病院関節温存・
スポーツ整形外科センター

かつては「膝の骨切り術＝高位脛骨骨切り術 (high tibial osteotomy : HTO)」だったが、近年では解剖学的な膝形状維持および関節面水平化を目的に、個々の変形中心に応じた「膝周囲骨切り術 (around-knee osteotomy : AKO)」を使い分けることが推奨されている。この術式の進化と裏腹に、AKO の複雑化に困惑する医師が増えたのも事実だが、いかに複雑化しようとも「普遍的な基礎知識」があり、それに従い確実に手術を行うことが AKO 成功の鍵である。従来の教科書や雑誌の特集では術式別の縦割りの解説が一般的だが、本特集では術式各論には触れずに、AKO の「普遍的な基礎知識」をさまざまな視点から横断的に網羅した。

まず AKO の基礎への理解を深めるために、AKO の未来的展望(中山寛先生)と歴史的展望(近藤英司先生)を対比して解説していただいた。また半月板フープの概念で大きく変わった AKO の適応とタイミングや(秋山武徳先生)、半月板治療から見た AKO の必要性(古賀英之先生)は近年の最大のトピックである。画像検査では 3 次元 CT や画像解析ソフトなどの発展が AKO に多大な貢献をしたのは確かだが、今こそ古典的撮影法の基礎を再確認する必要がある(田畑悦子先生)。またその画像をいかに評価して術前計画を行うかが極めて重要である(小川寛恭先生)。

変遷の多い中で、昔も今も変わらぬ膝の解剖を熟知して術野の展開を行い(岡崎賢先生)、かつ骨折治療の基礎となるプレート固定の原理を熟知して手術を行うことが AKO の合併症回避には欠かせない(五嶋謙一先生)。また本邦では開大式 HTO への人工骨挿入が一般的だが、これは単なる補填材料ではなく、HTO の構造を支える重要な力学的役割を担う固定材料であるという認識が必須である(藤間保晶先生)。さらに AKO は術後の膝の生体力学的特性に基づいた安全な後療法が重要となるため、最後には小生が後療法に関わる基礎知識を解説した。

多くの膝関節外科医の皆様がこの特集号を熟読いただき、安全確実な AKO を 1 つの軸とした「膝関節温存文化」が本邦に普及することを切望する。